

生涯学習だより



人心〜「人きたえあう【ふゆ】……北国に生きる力」

〜かみしほろの健やかな育ち〜

年間テーマ 「わが町の教育」



昭和40年学芸会練習にて

◇私の小中学校の思い出〜その三〜◇

小学校五・六年生になると運動会練習の前にグラウンドの草取り作業があります。みんな家からホーを持って登校します。グラウンドがきれいになつてから練習を始めます。午後の時間帯にやっていたと思います。

中学生の時は、毎年のように冷害による凶作が続きました。殆んど農家の子どもでしたので弁当もままならぬ家庭もあり、父母が交代で給食(当番)をつくり、お昼に温かいみそ汁が食べられました。じゃがいも、人参、大根など野菜の入ったみそ汁が美味しかったのを覚えています。

(田中 松雄)



◇みんなでダンスーダンスー！ダンスー！ー！◇

一月十六日(土)、ふれあいプラザ研修室で、「ニャアティソール教室」が行われました。ニャアティソールとは、ケニア・ルオー族の伝統楽器「ニャアティ」と日本の「よさこいソール」が融合して生まれた踊りです。アフリカ特有の魂を揺さぶる様なリズムに自然と心も体も動き出します。

講師は、塩谷直大先生です。オホーツク管内の小中学校教諭です。片道二時間かけて来て下さいました。全国各地の小中学校で、運動会の遊戯種目としてこの「ニャアティソール」が取り組まれるようになってきました。子ども達が燃えに燃えて踊

る事実が、全国各地の小中学校で生まれています。

当日は、幼児五名・幼児の保護者五名・小学生六名・大人九名、計二十五名の参加がありました。子どもから大人まで様々な年齢層の参加でした。異年齢交流は、社会教育が目指している大きなものの一つです。

子どもから大人まで、一つの踊りで流れる汗がとても素敵でした。この町の社会教育主事として、今後とも異年齢交流の場をたくさんつくっていきます。

(伊藤 俊二)



◇ママのじぶやき④〜こども園ほろん◇

『こども園ほろん』が開園してまもなく一年が経とうとしています。こども園ができるまでは、「保育所を新しく建て替える」という話を聞いていましたが、それから何年も経過し、本当に建てるのか疑問に思うようになっていた矢先に本格的な事業計画の話が耳に入りました。



四月、親も子も待ちに待った入園式。

町長をはじめ、たくさんの方々が集まり盛大な式になりました。ありがたいことにふるさと納税夢基金の援助もあり、今まで少なかった絵本も増え、絵本のコーナーを充実したものにしてくれました。この一年、施設はできても駐車場整備や園庭が秋まで使用できず、水遊びなどの心配もありました。その反面、英語専属のメイ先生が来てくれたり、年長児の私立保育所との交流が多く、バスで合流して糠平に行ったり、糠平の子が定期的に上土幌で活動したりと活動の幅が広がってきたように思います。また、今までなかった食育の活動や年長児対象の夏まつりと初めての行事を作ってくれ、こども園になり忙しい中、先生方には一生懸命保育して下さい、感謝しています。

親がその中でも特に感謝しているのが、保育料減額ではないでしょうか。幼稚園型は無料、二人目も一人目が高校生までなら半額（一人目は無料）と子どもに手厚くなりました。それが来年から十年間は、幼稚園型、保育園型共に無料化になるそうです。働いても、保育料で手元に残らないと言われる現代でとても家計に優しい、ありがたい話です。

再来年度からは生涯学習センターも新しくなり、その中に学童保育所もできます。次々に新しい施設ができ嬉しい限りですが、せっかく新しくできる施設を作るだけで満足せず、みんなが使え、みんなが楽しめる快適な空間になることを期待しています。

これからの子ども達にこども園だけではなく、学童保育所や学校にもいろいろな形でたくさんの方々の支援が行き届くことを期待します。以前から妊婦健診費用の補助をしたり、予防接種費用の無料化、医療費の高校生まで無料化と年々子どもに手厚い町になって



います。

これからの未来の子ども達のためにも、もっともつと住みやすく「子どもに手厚く優しい町」と言われるようになって自分達の町が誇らしいでしょうね。

(吉田 恵)

◇土曜国語塾通信冬号「人格の完成」を目指して◇

「教育の目的は何ですか？」

こういきなり問われて、迷わず答えられる人はそう多くはいないでしょう。皆さんはどう答えますか。『教育基本法』第一条は「教育の目的」です。

「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」

「教育は人格の完成を目指す」・・・これが、我が国の「教育の目的」です。人格の完成が、根本であることが分かります。しかし、「人格の完成」とは、抽象的で分かりにくいです。『教師の心に響く55の名言』野口芳宏著には、このように書かれています。

「利他と公益を常に考えて行動できる人は、人格が完成に近いと見ていいだろう。」

・利他とは利己の対義語で、自分の行為によって他人を幸福にすること。公益とは、国家・社会の利益。つまり、「自他共の幸福を追求する人を育てること」が教育の目的と言えるのではないだろうか。

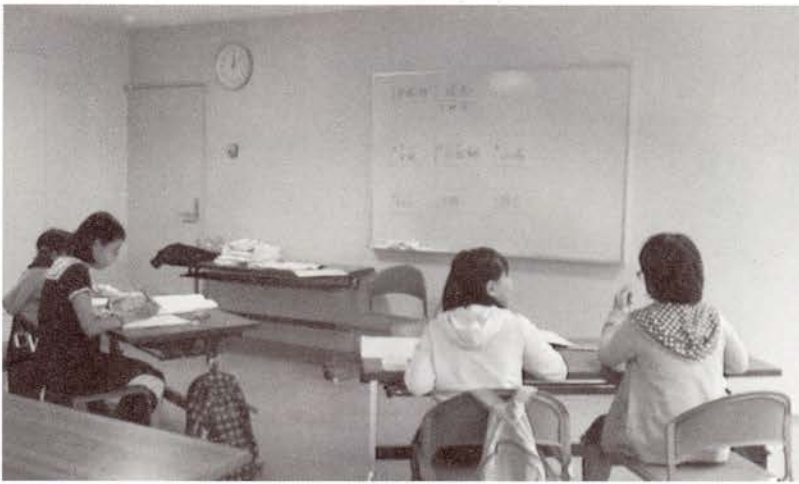
二月、社会福祉協議会の主催で「ボランティア実践発表交流会」が開かれました。町内の五・六年生が集まり、各学校のボランティア活動の報告を紹介し合うものです。先ほどの利他や公益は、まさにこの「ボランティア」に通じるものがあります。子ども達が考え行動した取組は、小さなものかもしれませんが、ほ

んのわずかなものでも、多くの人の協力や長い時間の積み重ねで、大きな力になっていきます。我々大人も負けてはいられません。私が、ボランティア土曜国語塾を始めてもうすぐ丸二年になります。計二十二回実施し、参加延べ人数は百五十人を超えました。最近は大人数の方も加わり、小学生にとって良い刺激となつています。ささやかなボランティアですが、異世代交流の場としても機能しているのです。少子化で子どもの数が減つています。一人一人が、掛け替えのない存在です。町の宝であり、国の宝でもあります。その子ども達の育成のために、社会教育の果たす役割は非常に大きいと言えます。しかし教育は、子ども達だけのものではありません。『教育基本法』第二条は「生涯学習の理念」です。

「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」

まず我々大人が、人格の完成を目指したいものです。そして、豊かな人生を送ることが、子ども達の最良の環境になることでしょう。利他的実践（ボランティア）は本当に楽しいものです。生涯をかけて、「人格の完成」を目指し、学び、行動したいものです。

(和嶋 康彦)



◇授業とは……◇

十二月最終週の水曜日の四時間目の学級活動の時間。

- ①受験の願書を書きする（一枚で終わる人、一枚の人、二枚の人もいます）
- ②パーソナルポートフォリオを作る（全員が十一月の宝物をポートフォリオ…自分専用のファイルに入れて価値づけします）
- ③写真家小寺卓矢さんから届いた、出版予定の本に関する写真ラフページを共有し、メッセージを読む

することは二つのユニットにしました。

大きな学習活動を一時間通すのは、子ども達の実態を見ると難しいのです。

既にこの傾向は二〇〇〇年前後に鳴門教育大学の小西正雄さんなどが、授業はバラエティ番組に勝てるのか、というような形で提言していたことでした（『消える授業 残る授業』明治図書など）。

一時間いっぱい同じことをずうっと全員でやり続けるというようなことが、学校では難しくなってきたのです。

さて、では、この①③のユニット、どの順番で授業を流しましょうか。授業を流す時に、最近の僕の中で優先順位が高いのは二つです。

- 一、学習形態の合理性（個人でやるか一斉にやるかグループでやるかなど）
- 二、組み合わせの合理性（どういう順番でやるのが先生も子どもも取り組みやすいか）

学習形態を考えると、受験の願書を書く作業は、プライバシーにも配慮したいので、普通の座席（スクール形式）がいいです。同様に、写真ラフとメッセージを読む活動も前を向いている方がいいですが、映像を見ますからシアター形式（劇場のように弧の形にする）がいいです。

同じ教室前方を子どもが向いて行う授業でも、この二つの学習内容は大きく違います。

願書書きは、個別の作業で、しかもそれぞれ作業量も違ってきます。写真活動は一斉に写真を見せながら説明するわけですから、昔ながらの一斉授業です。一

斉に集団を動かしますから、早く終わった人とゆっくりの人の間に学習活動の隙間の時間（空白の時間）が生まれたりはしません。

一方、パーソナルポートフォリオづくりは交流をベースに自分や自分と他者との関係を振り返るワークシヨップです。グループになってワイワイやれるのがいい。もちろん個人もペアもチームも立ち歩きもあっていい。

以上のことを考えていくと、上記の学習の組み合わせは（③↓①↓②）がいいと考えることになります。

実際の授業の流れもそうになりました。

写真活動は冒頭十分間全員で情報共有をしました。形態は変則シアター形式です。緩い弧のような形で全員が前を向きます。続く願書書きは、机をまっすぐにしたスクール形式です。その後、各自が作業を終え次第、終わった者同士で集まって机をつけます（アイランド形式）。教室の後ろの「しあわせの部屋」も併用して、ポートフォリオづくりが進んでいきます。

しかし：「自己管理能力」「自己調整能力」といったことを考えれば、本当は、この三つの順番を子ども達自身が決めるのが一番いいと、僕は考えています。

実際、僕の授業では、複数のユニットについて、何からやるかを子ども達と相談して決めることはしばしばあります。例えば、読み聞かせからするか、作文からするか：子ども達と相談して決めたりします。教室の中に別々なスタートをする子がいてもいいと、僕は考えています。

今、よい授業の価値基準が揺らいでいるように思います。ワイワイガヤガヤ話す子ども達の様子を見てイライラする先生も、シーンと先生のチョーク音だけが響く様子が気持ち悪いという先生もいます。

この問題への有力な答えの一つは、熊本大学の苦野一徳さんが『教育の力』（講談社現代新書）などで主張しているこれからの教育の方向性へ「学びの個別化」「学びの協同化」「学びのプロジェクティブ化」の融合、だろうと考えています。

全員が同じことをするという学習形態をやめる。各自が自分の特性・興味・能力に合わせてゆっくり学んだりせかせかせか学んだりできる。誰と学ぶかも含め学校の枠組みが許容できる範囲内で、子ども達が選択できる経験をたくさん持つ。

個別学習支援を増やすという道筋で解決するのではなく、子ども達が自己選択する、という方向での解決を目指す。そういうことかなと、近未来の教室の授業像を夢想しています。

（石川 晋）